

「仕えて下さる神」 一使徒行伝講解説教 39-

使徒行伝 17章 16節～34節

説教 本庄侑子 牧師

パウロは、アテネで至るところに偶像があるのを目にし、心に憤りを感じました。私たちを愛し抜いてくださる唯一の神がおられるのに、アテネの人たちが自分たちで神々の像を造り、拝んでいたからです。

アテネには、エピクロス派やストア派と呼ばれる哲学者たちがいました。エピクロス派は、神々は世界から離れたところにおいて、何の影響も与えないので、人間は苦しみや恐怖に対して、心地よいことや静けさを求めて生きるべきと考えていました。ストア派は、神は世界の秩序や美しさに現れてくるので、人間は世界で起こる出来事に抵抗せず、あるがままを受け入れて生きるしかないと考えていました。いずれも、現代に通ずる考え方だと思います。

パウロは、彼らに対してイエスとその復活について語りました。対して彼らは、聞きかじったことをつまみ食いして話す人と冷笑し、外国の神についての話だと言った人もいました。しかし、アテネは学問の中心地でした。みんな知識欲がありました。パウロの話冷笑しながらも、神々についての新しい教えを聞いてやろうと、アレオパゴスの評議所に連れて行きました。

パウロは語り出しました。「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。」(22節)。おびただしい数の像はアテネの人たちの信心深さを表していました。パウロはそのことに触れながらも、「知られない神に」と刻まれている祭壇について指摘しました。

この祭壇は、かつて疫病が流行したことをきっかけに作られたという説があります。確かに、人間が神々を祭るとき、そこには叶えて欲しい願望や避けたい災いがあるものです。願望や災いのたびに像を作っていたら、神々の数もどんどん増えていきます。そうするうちに、今自分は、どの神に願って良いか分からなくなることもし起ころうでしょう。だったらとりあえず、「知られない神に」としておくのが安心です。

また、アテネの人々はあらゆるものを神々にしました。しかし、ふと不安になるのです。もしかしたら自分たちが気付いていない神がいて、その神の祭壇がないことで怒りを買って、災いをこうむるかも知れない。それを避けるために「知られない神に」という祭壇を全てをカバーしてくれる保険として築いたのかもしれませんが。いずれにせよ、人々は人生の不安やたたりへの

恐れが拭えず、神々を作り続けてきたのです。

パウロは語りました。神は、人間が作り出した方ではない。唯一の神が世界を、私たちを創られたのだ。だから、神は人に何かしてもらわなければならないと十分で、機嫌を損ねてしまうような方ではない。むしろ、私たちが気づいていなくても、命と息と、必要な全てを与え、仕えていてくださる。

エピクロス派が考えるように、遠いところにおいて、この世界に関心を持たない方ではない。ご自分がお造りになった世界、私たちの生活の隅々に至るまで関心をもって生きて働いておられる。ストア派が考えるように、世界の理性や秩序という法則に閉じ込められる方でもない。もっと人格的で、私たちに語りかけ、私たちが応えるのを待っておられる。このお方が求めておられるのは悔い改め(方向転換)だ。あらぬ方向に向かってきたのを、神の方に向き直り、神の呼びかけにお応えして、神と共に生きていくことだと。

神は、私たちを愛しておられます。そのことを私たちが知らなくても、必要を与えて、私たちに仕えてくださっています。もしかしたら、私たちはいただくものさえいただければ、それで十分と思うかもしれませんが。それを与えてくださる方がどんな方であり、どんな思いでおられるのかについては興味がない。「知られない神に」のままでも良いのかもしれませんが。

しかし、神は与えるだけでなく、私たちと共に生きることをこそ望んでおられます。愛する子どもたちがご自分の方に向き直って、ご自分との関係の中で生きようになること、そして永遠に共にあることを望んでおられます。

この話を聞いて、ある者はあざわらい、ある者は「いずれまた」と去って行きました。しかし、信じた人々もいました。神と共に生きる新しい命を生き始めた人々がいたのです。

神は私たちにも言われます。恐れや不安を拭うために虚しい偶像を作り出さなくていい。恐れや不安があるのなら、私のところに持ってきたらいい。私があなたの神。私があなたに仕え抜く。私を信じて、今日ここから、私と共に生きるのだ。

(記 本庄侑子)